

 <p>日本組織培養学会 会員通信 第130号</p> <p>平成25年 7月 18日</p>	<p>発行者 * 森 一憲 (昭和大学)</p> <p>* 責任者連絡先 〒142-8555 品川区旗の台1-5-8 昭和大学 薬学部 生体分子薬学講座 腫瘍細胞生物学部門 TEL: 03-3784-8209 E-mail: mori@pharm.showa-u.ac.jp</p>
---	---

目次

- 1. 新会長就任ご挨拶 2
- 2. 平成25年度 幹事会報告 3
 - 1) 新執行役員紹介 3
 - 2) 既存専門委員会の継続、委員長の交代、ならびに新規委員会の設置 3
 - 3) 庶務報告 4
 - 4) 奨励賞応募条件、応募書式等の変更 4
 - 5) 新評議員の承認 5
 - 6) 審議事項 (会則および細則の改正、会計報告、抄録集以外のペーパーレス化) 5
 - 7) 第87回大会概要 11
- 3. 第86回大会を終えて 12
 - 1) 大会世話人報告 12
 - 2) 奨励賞審査結果 13
 - 3) 奨励賞受賞者から 14
- 4. 各種委員会報告 15
 - 1) 教育研究システム委員会報告 15
 - 2) 情報企画委員会報告 16
 - 3) 編集委員会報告 17
 - 4) 細胞品質管理等普及委員会 (新規設置) 17
- 5. 評議員名簿 19

1. 新会長就任ご挨拶

山中伸弥教授が開発した iPS 細胞樹立技術が昨年のノーベル医学生理学賞を受賞した。iPS 細胞樹立技術が可能としたものは、きわめて簡便な方法で体細胞から ES 細胞と同様な多能性幹細胞を取得できるという事である。iPS 細胞樹立技術は、再生医療分野のみならず、疾患特異的 iPS 細胞を使用した疾患研究、創薬研究等への応用も可能であり、細胞培養の歴史に残る革新的な技術開発である。また、iPS 細胞樹立技術が示したもう一つの明瞭な事実にも大きな意味があると思う。即ち、細胞の可塑性である。事実、体細胞から直接他の分化細胞を誘導する direct conversion 技術なども相次いで開発されており、細胞に様々な可塑性があることは疑う余地がなくなった。そして、そうした細胞特性と新規細胞工学技術との融合による細胞培養分野のビッグバンが始まったという様相を呈している。20 世紀終盤は、PCR 技術や遺伝子欠損マウス作成技術（どちらもノーベル賞受賞技術）などによって、遺伝子を自由自在に操作する時代であったとするならば、21 世紀初頭の現在は、細胞を自由自在に操作するという時代の幕開けとも言える。

上記の様な状況下、当然の流れとして、細胞培養を用いた研究や応用の分野は急速な発展・拡張を遂げている。しかし、細胞培養技術がどのように発展し、また細分化されても、基本となる培養操作というものは不変である。本学会では、様々なレベルの培養講習会を研究コミュニティに提供しているが、こうした貢献は、今後益々その重要性を増すものと考えている。また、誤認細胞の使用は未だに研究コミュニティから完全には駆逐されておらず、大きな問題として残っている（Nature 492: p.186, 2012）。誤認細胞の排除には世界的な連携協力も必要であり、そのための活動も始まっているが、日本国内においてもこれに関して中心となる窓口のようなものが必要であると思う。そこで、今年度より、本学会に「細胞品質管理等普及委員会」を新たに設置した。同委員会では、これまでも実施してきた「培養質問箱」を継続して実施していくと共に、細胞の品質管理、特に細胞誤認排除に関する相談に応じていく予定である。

会長 中村幸夫

(平成 25 年 6 月 28 日)

2. 平成25年度 幹事会報告

1) 新執行役員紹介

会長	中村 幸夫 (理研バイオリソースセンター)	
幹事	教育研究システム委員会	片岡 健 (岡山理科大学)
	編集委員会	二川 浩樹 (広島大学大学院)
	情報委員会	竹澤 俊明 (農業生物資源研究所)
	情報企画 (会員通信、抄録集等)	森 一憲 (昭和大学)
	教育・奨励賞	絵野沢 伸 (国立成育医療研究センター)
	国内渉外	樽松 美治 (コージンバイオ株式会社)
	海外渉外	Renu Wadhwa (産業技術総合研究所)
	諸事の会長補佐	寛山 隆 (理研バイオリソースセンター)

会則第 10 条に基づく会長指定職

庶務:	間中 研一 (獨協医科大学)
会計:	西條 薫 (理研バイオリソースセンター)

2) 既存専門委員会の継続、委員長の交代、ならびに新規委員会の設置

編集委員会、教育研究システム委員会、情報委員会、テクニカルアーカイブ委員会について、今後も継続することを確認した。また、編集委員会、教育研究システム委員会の委員長の交代、ならびに細胞品質管理等普及委員会を新規に設置しましたので、以下にご報告します。

編集委員会・委員長	岡本 哲治	⇒ 中村 幸夫
教育研究システム委員会・委員長	古江-楠田 美保	⇒ 片岡 健
情報委員会・委員長	坂野 俊宏	
テクニカル・アーカイブ委員会・委員長	浅香 勲	
(新設) 細胞品質管理等普及委員会・委員長	小原 有弘	

3) 庶務報告

会員件数 (平成 25 年 5 月 29 日現在)

正会員	506 名
学生会員	111 名
名誉会員	21 名
賛助会員	21 名
寄贈会員	1 名
合計	660 名

4) 奨励賞応募条件、応募書式等の変更

奨励賞の応募数を増やすため、奨励賞応募条件の改正ならびに応募書式の簡易化が提案され、幹事会で承認された。改正部分を新旧対応表としてまとめましたので、以下に報告します (改正、加筆部分を太字下線で表記)。

日本組織培養学会奨励賞選考規定 (平成 25 年 6 月 1 日改正)

現行	改正後
第 3 条 受賞対象者 本学会大会の筆頭演者であって、当該会計年度の 4 月 1 日現在で <u>35 歳未満</u> の会員であること、原則として、3 から 5 名に授与される。 <u>なほ</u> 、受賞者は再度応募できない。	第 3 条 受賞対象者 本学会大会の筆頭演者であって、当該会計年度の 4 月 1 日現在で <u>40 歳以下</u> の会員であること、原則として、3 から 5 名に授与される。 <u>尚</u> 、受賞者は再度応募できない。
第 5 条 応募方法 <u>演題申込に時</u> に奨励賞応募の旨を明記し、本会評議員の推薦状ならびに履歴書各 1 通を演題とともに大会事務局に提出する。 <u>なお</u> 、応募の期限は演題申込締切日とし、応募演題は一人一演題に限る。	第 5 条 応募方法 <u>演題申込時</u> に奨励賞応募の旨を明記し、本会評議員の推薦状ならびに履歴書各 1 通を演題とともに大会事務局に提出する。 <u>尚</u> 、応募の期限は演題申込締切日とし、応募演題は一人一演題に限る。
附則: 本選考規定は <u>平成 22 年度</u> から実施する。	附則: 本選考規定は <u>平成 26 年度</u> から実施する。

5) 新評議員の承認

幹事会において、下記先生の評議員への推薦があり、承認された。

山崎 泰助 先生 (公益財団法人 河野臨床医学研究所 肝細胞研究室)

なお、評議員は会長、幹事、および会則第 10 条に基づく会長指定職をあわせ、68 名となった。

(評議員の詳細は巻末の評議員リスト (p.19) 参照)

6) 審議事項

会則・細則の改正

会則と細則の改正提案があり、第 86 回大会総会において承認された。会則と細則の改正部分を新旧対応表としてまとめましたので、以下に報告します (改正、加筆部分を太字下線で表記)。

日本組織培養学会 会則 (平成 25 年 6 月 1 日 改正)

現行	改正後
第 4 章 執行役員 第 12 条 幹事会は、 <u>大会の開催地および世話役</u> を決定し、委嘱する。	第 4 章 執行役員 第 12 条 幹事会は、 <u>大会会長</u> を決定し、委嘱する。
附則 2. 本会則は <u>平成 21 年 5 月 20 日</u> 施行する。	附則 2. 本会則は <u>平成 25 年 6 月 1 日</u> から施行する。

日本組織培養学会 細則 (平成 25 年 6 月 1 日 改正)

現行	改正後
<p>第 1 章 会員</p> <p>第 4 条</p> <p>1. 会長は、幹事の<u>なか</u>から 2 名の選挙管理委員を委託する。選挙管理委員は、選挙事務を行う。</p>	<p>第 1 章 会員</p> <p>第 4 条</p> <p>1. 会長は、幹事の<u>中</u>から 2 名の選挙管理委員を委託する。選挙管理委員は、選挙事務を行う。</p>
<p>第 4 章 幹事会</p> <p>第 5 条</p> <p>幹事会は<u>年 2 回</u>開催する。但し、会長が必要と認められた時、または幹事の 3 分の 2 以上が開催を要求した時は、臨時幹事会を開催することができる。</p>	<p>第 4 章 幹事会</p> <p>第 5 条</p> <p>幹事会は<u>年 1 回以上</u>開催する。但し、会長が必要と認められた時、または幹事の 3 分の 2 以上が開催を要求した時は、臨時幹事会を開催することができる。<u>また、幹事会は、会長が必要と認められた時、かつ幹事全員の賛同を得た場合には、書面 (電子メール利用を含む) のみにより開催することができる。</u></p>
<p>第 8 章 事務局</p> <p>第 15 条</p> <p>本会の事務局は、<u>〒113-0033 文京区本郷 7-3-1 東京大学大学院医学系研究科付属疾患生命工学生センター 放射線研究領域内</u>とする。</p>	<p>第 8 章 事務局</p> <p>第 15 条</p> <p>本会の事務局は、<u>〒305-0074 茨城県つくば市高野台 3-1-1 独立行政法人 理化学研究所バイオリソースセンター細胞材料開発室</u>とする。</p>
<p>第 9 章</p> <p>第 18 条</p> <p>本細則は、<u>平成 21 年 5 月 20 日</u>より実施される。</p>	<p>第 9 章</p> <p>第 18 条</p> <p>本細則は、<u>平成 25 年 6 月 1 日</u>より実施される。</p>

平成 24 年度会計報告

庶務・会計幹事 山本 直樹

平成24年度決算書（平成24年4月1日～平成25年3月31日）

一般会計

【収入の部】

勘定科目	平成 24 年度予算額	平成 24 年度決算額	備 考
前年度繰越金	1,715,244	1,715,244	
正会員会費	1,500,000	1,440,000	214 件
学生会員会費	100,000	99,000	33 件
賛助会員会費	500,000	270,000	9 件
入会金	50,000	64,000	
機関誌関連収入	200,000	201,428	購読料, 別刷代, 著作権使用料, 許諾抄録利用料等
講習会テキスト販売費	100,000	138,000	
雑収入	100	269	普通預金利息等
単年度収入合計…①	2,450,100	2,212,697	
収入合計…②	4,165,344	3,927,941	(単位:円)

【支出の部】

勘定科目	平成 24 年度予算額	平成 24 年度決算額	備 考
機関誌発行費	1,200,000	470,400	31 巻 1 号 (印刷費)
会員通信発行費	40,000	36,750	129 号 (印刷費)
学会業務委託費	800,000	772,971	郵送費, 管理費, 会費請求, J-STAGE アップロード費等
第 86 回大会補助金	600,000	600,000	
教育研究システム委員会	200,000	144,760	
テクニカルアーカイブ委員会	200,000	0	
情報企画委員会	600,000	297,675	
幹事会議費	150,000	0	
雑費	5,000	3,885	振込み手数料等
単年度支出合計…③	3,795,000	2,326,441	
単年度収支(=①-③)	△ 1,344,900	△ 113,744	
次年度繰越金…④(=②-③)	370,344	1,601,500	
合計(③+④=②)	4,165,344	3,927,941	(単位:円)

特別会計

【収入の部】

勘定科目	平成 24 年度予算額	平成 24 年度決算額	備 考
前年度繰越金	6,971,245	6,971,245	
寄付金収入	100,000	80,847	機関誌以外の出版物収益寄付等
第 85 回大会収益	0	600,000	第 85 回大会収益
雑収入	1,000	1,040	普通預金利息等
単年度収入合計…①	101,000	681,887	
収入合計…②	7,072,245	7,653,132	(単位:円)

【支出の部】

勘定科目	平成 24 年度予算額	平成 24 年度決算額	備 考
学会奨励賞	150,000	142,236	奨励賞受賞者 2 名、賞状用紙代
SIVB World Congress 関連経費	450,000	392,515	SIVB 協賛費、シンポジスト渡航援助費等
雑費	3,000	2,205	振込み手数料等
単年度支出合計…③	603,000	536,956	
単年度収支(=①-③)	△ 502,000	144,931	
次年度繰越金…④(=②-③)	6,469,245	7,116,176	
合計(③+④=②)	7,072,245	7,653,132	(単位:円)

平成 24 年度の決算書類は、小原 有弘 会員（独立行政法人 医薬基盤研究所 難病・疾患資源研究部）、坂野 俊宏 会員（株式会社マンダム 技術開発センター 基盤技術開発室）に監査をお願いし、厳正な監査の結果、会計は適切に処理されていることを確認して頂きました。本決算書は、第 86 回大会総会において承認されました。

平成 25 年度予算案

一般会計

【収入の部】

勘定科目	平成 25 年度予算額	備 考
前年度繰越金	1,601,500	
正会員会費	1,500,000	214 件
学生会員会費	100,000	33 件
賛助会員会費	300,000	9 件
入会金	50,000	
機関誌関連収入	200,000	購読料, 別刷代等, 著作権使用料, 許諾抄録利用料
講習会テキスト販売費	0	
雑収入	200	普通預金利息
単年度収入合計…①	2,150,200	
収入合計…②	3,751,700	(単位:円)

【支出の部】

勘定科目	平成 25 年度予算額	備 考
機関誌発行費	500,000	31 巻 1 号 (印刷費)
会員通信発行費	40,000	129 号 (印刷費): 128 号は未印刷
学会業務委託費	800,000	郵送費, 管理費, 会費請求, J-STAGE アップロード費等
第 87 回大会補助金	600,000	
情報企画委員会	300,000	
教育研究システム委員会	150,000	
細胞品質管理等普及委員会	0	
テクニカルアーカイブ委員会	0	
幹事会議費	0	
雑費	5,000	振込み手数料
単年度支出合計…③	2,395,000	
単年度収支 (=①-③)	△ 244,800	
次年度繰越金…④ (=②-③)	1,356,700	
合計 (③+④=②)	3,751,700	(単位:円)

特別会計

【収入の部】

勘定科目	平成 25 年度予算額	備 考
前年度繰越金	7,116,176	
寄付金収入	100,000	機関誌以外の出版物収益寄付等
編集委員会繰越金	800,000	第 85 回大会収益
雑収入	1,000	普通預金利息
単年度収入合計…①	901,000	
収入合計…②	8,017,176	(単位:円)

【支出の部】

勘定科目	平成 25 年度予算額	備 考
学会奨励賞	150,000	奨励賞受賞者 (2 名)、賞状用紙代
新しいホームページの構築	300,000	
J-STAGE アップロード費用	260,820	SIVB 協賛費、シンポジスト渡航援助費等
雑費	3,000	振込み手数料
単年度支出合計…③	713,820	
単年度収支(=①-③)	187,180	
次年度繰越金…④(=②-③)	7,303,356	
合計(③+④=②)	8,017,176	(単位:円)

抄録集以外のペーパーレス化

幹事会において、論文集号の印刷を行わず、大会抄録集号は従来通り印刷して会員に発送する『TCRC ペーパーレス化』が提案され、本提案は第 86 回大会総会で承認された (詳細は編集委員会報告 (p.17) 参照)。

2. 第 86 回大会報告

1) 第 86 回大会を終えて

第 86 回大会 大会長 レヌー・ワダワ

組織培養の研究は、基礎的な分子生物学や医療の分野において重要な発見をもたらしてきました。今後も、ナノ材料の開発とその医療への応用のための安全性評価、バイオインフォマティクスによる新医薬開発や遺伝子導入の妥当性の確認、組織再生プロトコルの検証等、基盤的な問題において、カギとなる役割を継続的に果たすと思われます。このような諸発見による最新かつ高度な臨床的結果を期待する一方で、日本組織培養学会（JTCA）は、基礎的な組織培養技術と、それらの生命科学とナノテクノロジーへの応用に重点的に取り組んでいます。

日本組織培養学会第 86 回大会は、組織培養に関する科学を他の基礎的・応用的分野と統合するという重要性を念頭に、産業技術総合研究所（AIST）つくば中央キャンパスにて、2013 年 5 月 30-31 日に開催されました。大会の運営にあたり、ご協力を賜りましたオーガナイザーの先生方、会員諸氏、参加者及び協賛企業の皆様に心より感謝申し上げます。

様々な分野からの参加者は、世界 7 か国、幅広い年齢層にわたり、250 名を超えました。参加者からは国際的で刺激と楽しみが多く、大会が成功裏に行われたとの評をいただいております。基調講演や特別講義は、細胞老化やがんの制御の分野での世界的な科学者により行われました。7 つの口頭発表セッションは、細胞老化・がん・分化・幹細胞・イメージング・成長因子シグナリング・ナノ材料のトピックで行われ、広い分野の専門家の交流の好機となりました。若手研究者には、口頭・ポスター発表（日本語および英語）を通じて視野を広げる機会となったほか、優秀賞獲得のチャンスを提供しました。さまざまな機器展示を通じての科学的人的交流も活発に行われました。参加者が交流を楽しみ、成果を持ち帰るというユニークな大会であったと思います。今一度、関係者の皆様に感謝申し上げます。

第 87 回大会は、2014 年 5 月 29-30 日に東京の星陵会館で行われる予定です。皆様に再びお目にかかれますことを、新たな成果を持ち寄って交流・討議が一段と活発に行われますことを楽しみにしております。

2) 奨励賞審査結果

奨励賞審査によせて

教育・奨励賞担当幹事 絵野沢 伸

このたび新幹事として第 86 回大会の奨励賞選考を担当させていただいた。いまでこそ、さまざまな学会・研究会が賞を設定しているが、本学会はこれらに先んじ、歴史は極めて古い。第 1 回の受賞者は菅幹雄博士（現ゼリア新薬工業株式会社 常務取締役研究開発本部長）で、1988 年の 61 回大会（世話人 高木良三郎 大分医科大学教授）のことであった。当時は出版後の原著論文が選考対象で、菅博士は英文誌 J Cell Physiol に掲載の ‘Fibroblast products adsorb to the culture substrate and stimulate growth of human umbilical vein endothelial cells（培養器壁に吸着した線維芽細胞由来因子によるヒト臍帯静脈内皮細胞の増殖刺激）’ により受賞した。今読んでもたいへん新鮮な名著である。その後、変遷の末、大会プログラムに YIA（young investigator’s award）セッションが設けられ、口頭発表とポスターを審査する形式となった。2001 年第 74 回大会以降の受賞者は学会ホームページに記されている。これによると来年開催の 87 回で大会長を務める竹澤俊明博士（独立行政法人 農業生物資源研究所）は 2002 年に受賞している。この年は 10 名がエントリーし、受賞者 4 名という狭き門であった。

今年はその竹澤博士が開発した新しい細胞培養基質「コラーゲンビトリゲル」を用い、肝細胞培養の研究を行った押方 歩おしかた あゆみさんが受賞した。演題名は「コラーゲンビトリゲル膜チャンバーを用いたヒト肝がん細胞の賦活化培養法の開発とその肝代謝・毒性評価システムへの応用」。細胞表面を空気に触れさせて培養する斬新な方法で肝細胞の薬物代謝能が高まったという成果で、培養方法論をひとつの大きな柱とする本学会にふさわしい内容であった。

大会に先立って行なわれた幹事会にて奨励賞の年齢制限が 35 歳未満から 40 歳以下に引き上げることが提案され、総会の議を経て認められた。次年度からはさらに多くの応募を期待している。本年惜しくも受賞を逃した研究もたいへん意欲的な内容であったので、是非、さらなる証左を積み重ねてチャレンジしていただきたいと思う。

3) 奨励賞受賞者から

押方 歩

((独)農業生物資源研究所 動物科学研究領域 動物生体防御研究ユニット)

この度は、第 86 回日本組織培養学会において奨励賞という大変名誉ある賞を受賞させていただき誠にありがとうございました。歴史ある学会でのこのような賞をいただくことができ、今後の研究生を送る上での大きな励みとなりました。日本組織培養学会大会においては、各分野において活発な議論が繰り広げられており、様々な知識を得る良い機会になりました。

本大会では、「コラーゲンビトリゲル膜チャンバーを用いたヒト肝がん細胞の賦活化培養法の開発とその肝代謝・毒性評価システムへの応用」という演題で発表させていただきました。生体内の結合組織に匹敵する高密度コラーゲン線維より成るコラーゲンビトリゲル膜 (CVM) をプラスチック円筒の片面に貼った細胞培養用のチャンバー (CVM チャンバー) は、チャンバー内に注いだ培養液が外側に漏れ出すことはないため、CVM 直下を固相あるいは液相のみならず気相としても使用できます。本研究では、CVM チャンバーを利用して、HepG2 細胞 (ヒト肝がん細胞) を用いた肝代謝モデルの構築およびその有用性について検証しました。「内側:液相, 外側:気相」の界面で HepG2 細胞をたった 1 日間培養することで、肝特異的機能であるアルブミン産生能、尿素合成能および薬物代謝酵素である CYP3A4 活性は外側を液相あるいは固相とした他の二条件に比べて向上できることが明らかとなりました。また、Fluorescein Diacetate を用いた蛍光顕微鏡観察で解析により、毛細胆管様構造を誘導できることが明らかとなりました。さらに、acetaminophen (APAP) に曝露した細胞では、APAP の濃度依存的にミトコンドリア膜電位の低下と細胞膜透過性の上昇が観察され、HepG2 細胞が APAP により障害を受けている状態が観察されました。これらの結果は、HepG2 細胞の機能および形態が賦活化される「液相-気相」の界面培養システムが、肝代謝および肝毒性の評価として有用であることを示唆されました。

最後に本研究は、(独) 農業生物資源研究所の竹澤俊明先生のご指導ならびに医薬品食品衛生研究所の石田誠一先生のご指導により遂行することができました。この場をお借りして深く感謝申し上げます。

4. 各種委員会報告

1) 教育・研究システム委員会

教育・研究システム委員会 片岡 健

本学会会員の皆様におかれましては、日頃より教育研究システム委員会の活動にご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。本学会が細胞培養士認定コースとして行っている細胞培養基盤技術コースⅠ・Ⅱ・Ⅲの運営が教育研究システム委員会の最も重要な活動ですが、開催責任者、指導者の諸先生のご尽力で滞りなく開催しております。

この細胞培養基盤技術講習会で実際に使用されている実習テキストが、平成24年3月に「細胞培養実習テキスト」（じほう、税別4,000円）として出版されました。出版に際して、古江-楠田 美保前委員長をはじめ多くの先生にご尽力いただきました。この場をお借りして御礼申し上げますとともに、会員の皆様も培養指導の際に是非ご活用くださいますようお願い申し上げます。会員の皆様は特別価格（1割引）にてご購入が可能です。ご希望の方は、教育研究システム委員会 片岡 (kenk@dls.ous.ac.jp) までご連絡ください。

本学会が認定する「細胞培養士」の名称を学会が将来にわたって使用し続けるためには、この名称を商標登録して学会固有のものとする必要があります。教育研究システム委員会では商標登録が可能かどうか、鈴木崇彦前会長の許可を得て検討して参りました。実際に登録を行うのは平成25年度になりますが、細胞培養士認定制度を継続するためには商標登録が必要との認識で準備を進めております。

最後に平成25年4月より岡山理科大学の片岡 健が、教育研究システム委員会委員長を古江-楠田 美保前委員長より引き継ぎました。これまでの方針を継承して、微力ながら組織培養研究の発展に尽くす所存です。会員の皆様にはご指導・ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

2) 情報委員会

情報企画委員会 坂野 俊宏

当委員会の昨年度活動実績、本年度活動計画、および次年度以降の課題についてご報告いたします。

2012 年度_活動実績

昨年度、当学会のホームページ (HP) について、専門業者への委託を前提としてリニューアルすること、および、その費用 (初期費用) として 60 万円の予算を計上すること、について、幹事会および総会にてご承認いただきました。しかしながら、計画のうち、大会 HP (<http://www.pac.ne.jp/jtca86/>) についてはリニューアルできたものの、学会 HP (<http://jtca.umin.jp/>) のリニューアルには至りませんでした。

2013 年度_活動計画

本年度は、この学会 HP のリニューアルを中心に活動してまいります。リニューアルは、①構成をシンプルに、②更新は担当者が直接・適時実施できるようなシステムとすることを基本方針にして行います。これは、利用者の利便性向上と、維持管理作業負担の軽減、委託費用の抑制が目的です。コンテンツは限定的になりますが、速報性が重要視される『細胞培養基盤技術コースの案内』『ニュース・お知らせ』などの掲載タイムラグは極小化されたいと考えます。

2014 年度以降の課題

ただし、『培養質問箱』の運用や『Archives』(過去の貴重な資料) の維持管理については、今回は計画外です。これらの作業負担分を外部に委託するのであれば、別途予算化が必要であり、来年度以降に向けた検討課題です。

最後になりましたが、当委員会の活動や学会 HP に関して、皆さまのご意見・ご要望、ご提案などをお寄せいただければ幸いです。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

3) 編集委員会

編集委員会 中村 幸夫

編集委員会の委員長は、長きにわたり広島大学の岡本哲治先生が担当して下さっていましたが、今年度から理化学研究所の中村幸夫が担当することになりました。岡本哲治先生のこれまでのご貢献に対し、学会を代表して心より御礼申し上げます。

様々な雑誌や学会誌がオンライン化している状況下、本学会の学会誌である Tissue Culture Research Communication (TCRC) もオンライン化を図るべく、これまでも様々な検討や努力がなされてきましたが、実現には到っておりませんでした。

本年5月29日に開催されました幹事会におきまして、以下のように決定し、5月31日の総会におきましても承認を得ました。

- (1) TCRC の発行は、年次大会の抄録号として、冊子体として発行することを継続する。
- (2) TCRC に投稿される総説・原著論文等に関しては、これまでと同様な Peer Review を経た後に、オンライン (J-STAGE インターネットジャーナルサービス) にて公開する。

会員の皆様の中にはご異論をお持ちの方も多数いらっしゃるかと存じますが、ご理解とご協力の程、宜しく願い申し上げます。末尾となりますが、TCRC への総説・原著論文等の投稿を、引き続き宜しく願い申し上げます。

4) 細胞品質管理等普及委員会

細胞品質管理等普及委員会設置について

細胞品質管理等普及委員会 小原 有弘

日本組織培養学会においては、細胞培養に関する情報発信ならびに技術指導を実施してきました。また、細胞の品質に関する問題に関してはホームページや年会でのシンポジウムを通じ、警鐘を鳴らしてきました。しかしながら、これまでに細胞の品質管理等に関して体系的な情報発信を実施できておらず、その基盤整備を行うため、細胞品質管理等普及委員会の設置を提案させて頂き、承認が得られました。本委員会の目的は、研究者が使用する細胞の品質管理の重要性を認識して頂き、適切

な細胞使用研究が実施されるように細胞品質に関する情報発信を行います。これにより日本の研究社会に貢献することを目指します。本委員会の活動予定としては、委員会としてのホームページを設置し、細胞品質管理に重要な情報発信を行うとともに、国際的に問題となっている細胞のクロスコンタミネーションに関してデータベースの作製およびデータ検索サイトの設置を行います。これによって細胞品質管理の重要性を研究者へ周知するための一助となれば、研究社会への貢献につながると考えられます。また、この活動を通じて日本組織培養学会の知名度・認知度が向上すれば、学会会員の増加につながると考えられます。会員の皆様にご協力を頂きながら本委員会の活動が研究社会に貢献できるよう努めたいと考えております。

実施内容（計画）

- ・細胞品質管理委員会ホームページの作製
- ・細胞クロスコンタミネーションに関するデータベースの作製
- ・細胞情報検索サイトの作製
- ・細胞クロスコンタミネーションリストの公開 など

委員

中村幸夫先生(理研 BRC・細胞材料開発室)

西條薫先生(理研 BRC・細胞材料開発室)

佐藤元信先生((独) 医薬基盤研究所・泉南資源研究施設)

小原有弘((独) 医薬基盤研究所・培養資源研究室) 他

【編集後記】

今年度より新幹事として、会員通信の編集を担当させていただくことになりました。ご多忙中にもかかわらず、ご寄稿を頂戴した皆様、ご助言やご指導を頂いた皆様へ、改めて心より御礼申し上げます。また、不慣れな編集作業に手間取ったため、発行に至るまで時間がかかったことをお詫び申し上げます。今後は、早く正確な情報をお伝えできるよう務めさせていただきますので、ご指導、ご協力のほど、よろしく願いいたします。(km)

5. 評議員名簿 (平成 25 年 5 月 29 日現在、敬称略、順不同)

評議員	
蓮村 哲	佐藤 敬喜
鈴木 利光	黒木 登志夫
鈴木 文男	高橋 君子
鈴木 崇彦	古江-楠田 美保
野瀬 清	許 南浩
白畑 實隆	宮崎 正博
難波 正義	丸野内 棣
筒井 健機	関口 守正
渡邊 正己	<u>間中 研一</u>
田仲 昭子	花岡 文雄
田中 憲穂	加治 和彦
竹内 昌男	岡本 哲治
大野 忠夫	永森 静志
蔵元 博行	井出 利憲
増井 徹	安本 茂
船津 和守	伊井 一夫
赤池 敏宏	伊藤 丈洋
西 義介	<u>絵野沢 伸</u>
清水 信義	佐藤 元信
星 宏良	坂野 俊宏
菅 幹雄	小原 有弘
杉山 俊博	上田 忠佳
水沢 博	浅香 勲
秦 宏樹	<u>中村 幸夫</u>
松村 外志張	田原 栄俊
小山 秀機	藤井 万紀子
柴沼 質子	澤田 秀和
三井 洋司	山本 直樹
佐野 恵海子	<u>竹澤 俊明</u>
佐藤 靖史	中村 和昭
山崎 泰助	

役員	
会長	中村 幸夫
幹事	絵野沢 伸
	片岡 健
	樽松 美治
	竹澤 俊明
	二川 浩樹
	寛山 隆
	Renu Wadhwa
	森 一憲
会長指定職	<u>間中 研一</u>
	西條 薫

なお、執行役員（会長、幹事、会長指定職）に選出された評議員の先生には下線を記しています。